

令和7年度 白糠町青少年海外研修事業 報告書



研修期間：令和7年10月24日～令和7年10月30日

視察先：インドネシア共和国(バリ島)

事前研修会

- ・第 1 回 令和7年8月19日 (火) 「アイヌの人たちの文化等のこと」
- ・第 2 回 令和7年9月14日 (日) 「フンペ (鯨) 祭イチャルパ参加」
- ・第 3 回 令和7年10月1日 (水) 「白糠町のこと、環境のこと」
- ・第 4 回 令和7年10月15日 (水) 「インドネシア共和国のこと」

令和7年度青少年海外研修事業

- ・日 時 令和7年10月24日 (金) から令和7年10月30日 (木)
- ・参加者 11名 (中学生6名、高校生2名、町立学校教員1名、引率者2名)
※ 参加生徒の内訳は、白糠学園3名、茶路中学校1名、庶路学園2名、白糠高校2名
- ・場 所 インドネシア (バリ島)
- ・事業内容 交流事業、視察研修事業

【第1日目:10月24日(金)】移動・結団

<行動記録> 12:15 釧路空港 集合・結団式 12:20 出発式(参加生徒代表 挨拶) 13:45 釧路空港 (ANA742便) 発 15:30 羽田空港 着、荷物受取 夕刻 羽田空港から専用車で成田空港近隣ホテルへ移動 18:30 夕食(ビュッフェ) (夕食後ミーティング実施)22:00 就寝

<研修の様子・所感> 釧路空港には、期待と不安が入り混じった表情の生徒8名が、大きなスーツケースと共に集合した。保護者の方々に見守られる中、結団式・出発式を行った。生徒代表の挨拶では、「白糠町の代表として、研修のテーマである環境問題や少数民族について深く学び、自分たちの視野を広げたい」という力強い言葉があり、事前研修の成果が感じられた。教育長からは、「インドネシアでは、『白糠町』だけでなく『日本』の代表として見られている。誇りを持って研修してきてほしい。」というお話があり、さらに気持ちが引き締まった。

釧路から羽田へのフライトは、国内移動とはいえ、生徒たちにとっては既に研修の始まりであった。羽田から成田へのバス移動では、首都圏の交通量や景色に圧倒されている様子も見受けられた。ホテル到着後、夕食のビュッフェでは長旅の疲れからか口数も少なめであったが、初めての仲間との宿泊にわくわくしている生徒もいた。食後のミーティングでは、指導室長から「体調管理と時間厳守」という話があり、生徒たちの表情も引き締まった。また、パスポートと貴重品の管理について、なくすとどれだけ大変なことになるかを具体的に説明し、全員で再確認した。初日の緊張と移動疲れを考え、早めに寝かせた。



【第2日目:10月25日(土)】インドネシア入国

<行動記録> 8:00 成田空港 集合、搭乗手続き・荷物預入、両替(ルピアへ) 11:00 成田空港 (GA881 便) 発
17:25 デンパサール(ングラ・ライ)国際空港 着(所要時間: 約7時間25分) 入国審査、荷物受取 現地ガイドと合流
18:45 夕食(中華・ファミリースタイル「テロックメラ」) 21:00 ホテルチェックイン、ミーティング、就寝

<研修の様子・所感> 早朝から成田空港での国際線手続きを行った。自動チェックインや税関、手荷物検査など、初めての体験に戸惑う生徒もいたが、引率の指示に従い、互いに声を掛け合いながら無事に通過できた。約7時間半のフライトは、生徒にとって初めての国際線体験であった。機内食に一喜一憂したり、映画を楽しんだりしつつも、赤道直下の国へ向かうことにワクワクしている様子であった。

デンパサール空港に一步足を踏み入れた瞬間、モワツとした熱気と、日本とは全く異なる音色、そして独特のお香の香りに、生徒たちは「本当に外国に来たんだ」とみんな驚きの表情を見せた。入国審査では緊張した面持ちでパスポートを提示していた。現地ガイドのワスティカさんが、空港に出迎えに来てくださっていた。ワスティカさんが明るく迎えてくれて、生徒たちの緊張も少しほぐれたようであった。バスでホテルへ向かう道中、無数のバイクが走る風景や建物がライトアップされている様子に、生徒たちは窓に釘付けになっていた。夕食は「テロックメラ」での中華・ファミリースタイルであった。大皿で運ばれる揚げ魚の甘酢あんかけや麻婆豆腐、エビのニンニク炒めなどに、生徒たちは「日本でもよく見る料理だ」「これは知っている味だ」と箸を進め、長距離移動の疲れを癒やしていた。ミーティングでは、日本との時差(1時間)と気候の違いをあらためて確認し、こまめに水を飲むこと(生水は厳禁、ミネラルウォーターの飲用)をしっかりと伝えるようにした。



【第3日目:10月26日(日)】バリ文化体験・少数民族との交流

<行動記録> 10:00 視察研修「バリブダヤ・バリ文化体験」(チャナン作り、民族衣装体験、フルーツカービング等)
(※生徒1名 休養) 12:30 昼食(ウエスタン・セットメニュー「ディアズガーデン」) 14:00 交流事業「トゥガナン村」訪問(※生徒1名 休養) バリ先住民族「バリアガ」との交流 17:00 移動 18:00 夕食(インドネシア・セットメニュー「マサマサ」) 21:00 ホテル着、ミーティング

<研修の様子・所感> この日は、本研修の主なテーマの一つである「少数民族」と「文化」に触れる重要な日であったが、残念ながら生徒1名が昨夜からの気候の変化か、体調を崩し発熱したため、無理をせず終日ホテルでの休養となった。引率団の団長が付き添い、体調を見守った。

休養した生徒を除く7名の生徒は、休養した仲間分まで学ぶべく、予定通り研修に参加。午前中はバリ文化体験施設「バリブダヤ」を訪問。生徒たちは色鮮やかな民族衣装を身にまとして記念撮影を行い、照れくさそうにしながらも嬉しそうな表情が印象的であった。ヒンドゥー教の日常のお供え物である「チャナン」作りでは、ヤシの葉でカゴを編む作業に苦戦。すいかを使ったフルーツカービングでは、「難しい!」と声を上げながらも、現地の講師に熱心に教わり、最終的にはそれぞれ違ったチャナンやフルーツカービングを完成させていた。昼食は「ディアズガーデン」で白身魚のソテーなど、食べ慣れたウエスタンメニューに一息ついていた。

午後は、今回の研修の中心となる「トゥガナン村」の訪問。ここは近代化が進むバリ島において、独自の慣習や伝統工芸「アタ(カゴ編み)」を守り続ける先住民族「バリアガ」が暮らす村である。村に足を踏み入ると、時間が止まったかのような静けさと、整然とした集落の造りに生徒たちは驚いた。村人たちが集まってくださった広場で、生徒たちは事前研修で準備してきたプレゼンテーションを披露した。白糠町の豊かな自然や産業、日本の文化、そして本町の重要なテーマであるアイヌ文化や、環境問題に対する日本の取り組みについて、写真や資料を見せながら一生懸命に説明した。その後、現地の子どもたちとの交流タイムとなり、日本から持参した「けん玉」や「コマ」の使い方を実演し、一緒に遊んだ。また、「折り紙」で鶴の折り方を教え、完成した鶴や遊具をプレゼントすると、子どもたちは満面の笑みを浮かべて大喜びしてくれた。言葉は通じなくても、遊びを通じて一気に距離が縮まり、とても盛り上がった。このことは、生徒たちにとっても大きな自信となったようである。世界が一つにつながっていく中で「伝統を守ること」の大切さと難しさを、直接感じることができた貴重な時間となった。

夕食は「マサマサ」でインドネシア料理のセットメニューをいただいた。見た目には非常に豪華な内容であったが、バリ島ならではの独特な香辛料がかなり強く(特に辛さが際立ち)、『これは何のスパイスだろう』と興味深く分析しようとする生徒がいる一方で、『辛くて食べられない』『口に合わない』と箸が進まない生徒も見受けられた。これもまた、日本との食文化の大きな違いを強く感じる貴重な体験であり、生徒たちが現地の食生活の現実を学ぶ機会となった。(なお、休養していた生徒も夕食時には解熱し、翌日からの研修には無事復帰できた。)



【第4日目:10月27日(月)】環境問題視察・グリーンスクール訪問

＜行動記録＞ 8:00 ビーチにて散歩 10:20 視察研修「Suwung スウォンコミュニティゴミ山見学」 12:00 移動
13:30 昼食(インドネシア・セットメニュー「ウマサリ」) 15:30 視察研修「グリーンスクール」訪問 18:00 ホテル着
19:00 夕食(中華・ファミリースタイル「クタプラザ」) 22:00 ミーティング

＜研修の様子・所感＞ もう一つの主なテーマ「環境問題」に正面から向き合う、非常に衝撃的な1日となった。午前中に訪問したスウォンのゴミ山(コミュニティセンター)は、想像もできないような光景であった。バスが近づくにつれて強くなる異臭に、生徒たちは思わず鼻を押さえた。施設の周囲には広大な土地にゴミが野積みされており、そこで働く人々の姿があった。生徒たちは言葉を失い、ただその現実を見つめていた。

事前研修で「環境問題」について学んできた生徒たちは、深刻な表情を浮かべていた。また、現地で案内して下さった日本旅行駐在員の岡部さんの説明に対し、言葉を失いながらも現実を直視しようと努め、真剣な眼差しで熱心にメモを取る姿が見られた。岡部さんの話を聞きながら、豊かな観光地の裏側にある現実と、自分たちの生活とつながっていることを強く感じさせられたようであった。この強烈な体験は、生徒たちに大きな問題を自分たちのこととして考えるきっかけになった。また、ゴミ山の中に、NGOが設立した学校があり、子供たちに勉強を教えたり、女性の大人に手に職をつける技術(使用済石鹸を再利用)を教えたりしていた。その中の少女の1人が、将来教師の夢があると紹介してくれたことに感動を覚えた。

まったく違っていたのが、午後に訪問した「グリーンスクール」である。すべて竹で造られた美しい校舎、堆肥化システムなど、徹底した「自然などを大切に、将来も続けていける仕組み」を追求する世界的に有名な学校である。生徒たちは、ゴミ山の衝撃から一転、未来の学校のような先進的な取り組みに「すごい」「こんな場所があるなんて」と驚きの声を上げた。しかし、同時に「ここは学費が高額で、一部の人がしか通えない。あのゴミ山で働いている人たちとは違いすぎる」と、新たな「格差」という問題に気づき、複雑な表情を見せる生徒もいた。環境問題の「深刻な現実」と「先進的な理想」という両極端を1日で体験し、生徒たちの心は大きく揺さぶられた。この日の体験で研修が深まっていると感じた。



【第5日目:10月28日(火)】現地高校との交流

<行動記録> 9:30 現地交流会「デンパサール第9国立高等学校」訪問 全体司会、交流の紹介、日本・白糠町の文化紹介 環境問題・少数民族についてのグループ交流（歓迎セレモニー、伝統舞踊披露、校内見学、伝統楽器・チャナンづくり体験 等）13:15 昼食（ソースチキンカツ弁当）14:50 視察研修「トゥグヌガンの滝」17:50 夕食（海鮮BBQ・セットメニュー「メラティカフェ」）19:20 ミーティング

<研修の様子・所感> 研修も後半に入り、自分たちで考えて行動する姿が見られた1日となった。午前中に訪問した「デンパサール第9国立高等学校」は、2020年に創立されたばかりの新しい学校であり、伺ったところ、本町が「海外の学校訪問を受け入れるのが初めて」であったとのこと。その事実が、とても熱心に歓迎してくれる姿に表れていた。

校長先生はもとより、父母会の代表の方までが正装で出席されており、学校全体でこの交流を待ち望んでいてくれたことがよく伝わり、引率者として私たちも背筋が伸びる思いであった。

歓迎セレモニーでは、同校の合唱部による見事な歌声が披露された。この合唱部は、インドネシア代表にも選出され、台湾でその歌声を披露したほどのハイレベルであり、生徒たちはその迫力とハーモニーにとても驚いていた。さらに、鮮やかな衣装をまとった生徒による伝統のインドネシア舞踊が披露され、その優雅で立派な動きに、本町生徒はじっと見つめていた。

その熱意に応えるべく、本町の生徒たちも臆することなく、担当生徒による白糠町の紹介プレゼンに続き、練習を重ねた「アイヌの踊り」をアイヌ衣装の姿で披露すると、今度は我々がインドネシアの生徒たちから割れんばかりの拍手と歓声を浴び、会場は一番の盛り上がりを見せた。

交流はセレモニーだけにとどまらず、校内見学、伝統楽器の演奏体験、そして第3日目に一度体験した「チャナンづくり」にも再度挑戦するなど、非常に多くの触れ合いの場が設けられた。生徒同士はすぐに打ち解け、グループ交流では片言の英語とジェスチャーを使い、学校生活からアニメの話まで、あっという間に笑顔の輪が広がった。「環境問題」といった真面目なテーマについても、身振り手振りで必死に意見を交わそうとする姿が見られた。あまりの盛り上がり、交流時間は予定を大幅に超過。言葉の壁を越え「伝えたい」「知りたい」という純粋な思いが溢れた、すばらしい時間であった。

昼食には、交流校の生徒たちとともに「ソースチキンカツ弁当」という、日本食のお弁当が提供された。生徒たちは現地高校生の温かい優しさと、久しぶりの慣れた味に嬉しそうであった。午後はトゥグヌガンの滝でマイナスイオンを浴びてリフレッシュ。そして夜は、有名リゾート地ジンバランの砂浜にテーブルが並べられた「メラティカフェ」で、豪華な海鮮BBQを囲んだ。インド洋に沈む壮大な夕焼けを眺めながら、波の音をBGMに食事をとるとい、まさに南国のリゾート気分を満喫できる最高のロケーションであった。生徒たちは、これまでの研修の緊張から解放され、この日体験した高校生との熱い交流の感動を興奮気味に語り合いながら、元気を取り戻した。



【第6日目:10月29日(水)】文化視察・帰国準備

<行動記録> 9:00 視察研修「ウブド市場・王宮」見学 11:30 昼食(インドネシア・セットメニュー「クルニア」) 12:40 視察研修「タナロット寺院」見学 18:00 夕食(和食・セットメニュー「寿司宮殿」) ホテル着、休憩(レイトチェックアウトの準備)19:30 町視察(お土産店「クスリナ」) 21:00 ングラ・ライ国際空港 着、出国手続き

<研修の様子・所感> 実質的な研修最終日。午前中は芸術の村ウブドを訪れ、王宮の立派な建物にバリの歴史を感じた後、ウブド市場での自由行動(お土産購入)となった。生徒たちは、積極的に店員と交渉する姿が見られた。最初は言い値で買いそうになっていた生徒も、仲間と協力しながら、見事に値引きを成功させ、戦利品を手に嬉しそうな顔をしていた。たくましくなると感心した。

午後は、バリ島でもとても景色が良い場所「タナロット寺院」へ。この日の午後、研修中初めてとなる一時的な雨(スコール)に見舞われたが、幸いにもすぐに止み、タナロット寺院に到着する頃にはすっかり回復していた。海に浮かぶ不思議で美しい姿に、生徒たちは言葉もなく見入っていた。この美しい景色を目に焼き付けながら、この数日間の中身の濃い体験をそれぞれが振り返っているようでもあった。「もう帰るのか、早いな」「日本に帰ったら、まず何食べよう」など、研修の終わりを惜しむ声と、日本が恋しくなる気持ちもあるようであった。夕食は「寿司宮殿」で、待望の和食セットメニューであった。寿司盛り合わせや天ぷら、そして久しぶりに味わうみそ汁に、生徒たちは「やっぱりこれだ」「日本食が一番美味しい！」と大きな安堵の表情を見せ、研修最後の夜を締めくくった。

夕食後、予定していたお土産店「クスリナ」での買い物のほか、研修期間中、行程の合間を縫って現地のスーパーマーケットなどにも数回立ち寄ることができた。ガイドやバス運転手の柔軟な対応のおかげであり、生徒たちは地元の人々が利用する店で、お菓子や雑貨などを見ながら日本との物価の違いや商品の違いに驚き、現地の人の暮らしの様子を直接感じる貴重な経験となった。

空港では、7日間大変お世話になった現地ガイドのワスティカさん、日本旅行インドネシア支社長と別れを惜しんだ。生徒たちが感謝の言葉を送り、ワスティカさんとの別れを残念に思った。出国手続きもスムーズに終え、全員無事に帰国の途についた。



【第7日目:10月30日(木)】 帰国・解散

<行動記録> 0:50 ングラ・ライ国際空港 (GA880 便) 発(機内泊) 8:50 成田空港 着(所要時間: 約7時間) 入国審査、荷物受取、税関申告、両替 午前 移動(乗合バス) 午後 羽田空港 搭乗手続き 12:45 羽田空港 (JL543 便) 発 14:25 釧路空港 着、荷物受取 14:40 解散式(団長挨拶、事後研修の連絡)

<研修の様子・所感> 深夜便での帰国となり、さすがの生徒たちも機内ではぐったりと眠っている時間が長かった。早朝、成田空港に到着。気温の低さや、周りから日本語が聞こえてくることに、無事に日本に帰ってきたことを実感した。バリ島での研修期間中は、6日目午後のスクールを除けば、連日快晴に恵まれ、研修プログラムに影響がなかったのは良かった。入国審査、税関、国内線への乗り継ぎと、最後の力を振り絞って行動した。

釧路空港の到着ロビーに姿を見せると、出迎えてくださった保護者の方々から温かい眼差しを感じた。生徒たちは、長旅の疲れと安堵感、そして少しの照れくささが混じった表情で、家族との再会を喜んでいて。解散式では、団長と教育長から激励の言葉が送られた。初日の緊張した面持ちとは打って変わり、自信とたくましさを増した生徒たちの顔を見て、引率者として無事に全日程を終えられたことに安心すると同時に、この研修の大きな成果があったと強く感じた。この7日間で彼らが見たもの、感じたこと、考えたことは、間違いなく彼らの人生の大きな力になるであろう。



【研修の成果と今後の課題】

1. 研修の成果

・目的意識の明確化と自分から行動する力の向上: 「少数民族」「環境問題」「文化交流」という明確なテーマを設定したことで、生徒たちは研修の全行程において目標を持ち続けることができた。特に、ゴミ山視察での真剣な眼差しや、現地高校での積極的な交流姿勢など、受け身ではない主体的な学びの姿がいろいろなところで見られた。これは、出発前の事前研修の成果でもある。

・いろいろな見方ができるようになった: トゥガナン村での「文化の継承」、ゴミ山での「深刻な環境汚染」、グリーンスクールでの「先進的な取り組み」、現地高校での「同世代との連帯」など、バリ島の持つ多様な側面(光と影)を体験することで、物事を一面からだけでなく多角的に捉える視点が身についた。

・問題を解決しようとする意識が生まれた: 特に環境問題については、その深刻な現実を目の当たりにした衝撃が大きく、生徒たちの中に「自分たちに何ができるか」という問題意識が芽生えた。この意識は、帰国後の事後研修や報告会における具体的な行動提案に繋がるものとして期待できる。

2. 今後の課題と提言

・事前研修のさらなる深化: 現地での学びを一番大きくするため、事前研修の段階で、バリ島の環境問題や少数民族の歴史的背景について、より深く学ぶ必要がある。また、白糠町における「アイヌ文化」や「環境の取り組み」を対比対象として明確に知ってもらい、現地でより深く比べながら考えることができるよう準備させたい。

・事後研修と成果の還元: 本研修は、アイヌ政策推進交付金を活用した事業でもある。「バリアガ」の文化継承のあり方と、白糠町の「アイヌ文化」の継承というテーマを繋げ、生徒たちが自ら考え、意見を言えるような事後研修をデザインする必要がある。研修の成果を、報告会や学校活動を通じて広く町民に還元し、生徒たちの経験を地域みんなのものにしていく取り組みを進める。

【総括】

今回の海外研修は、参加した生徒8名全員にとって、これまでの考え方を変えるような強烈な体験となった。幸い、研修期間中は第3日目に生徒1名が発熱により休養したものの、引率団の適切な対応により翌日には復帰でき、大きな問題にはならなかった。また、バリ島での日程は6日目午後に一時的なスコールに見舞われたものの、研修全体としてはほぼ快晴という天候に恵まれ、全ての予定を問題なくスムーズに行うことができた。加えて、行程表にはない現地のスーパーマーケットやお土産屋にも、現地ガイドのワスティカさんや日本旅行の皆様の柔軟な対応のおかげで立ち寄ることができ、生徒たちが現地の物価や生活感を肌で感じる良い機会となったことは、大きな成果であった。

異国の文化、宗教、そして日本では想像し得ない現実に直面し、戸惑い、悩み、それでも前向きに学び取ろうとした生徒たちの姿は、引率者にとっても大きな感動であった。この7日間で得た「広い視野」と「挑戦する心」を胸に、彼らが白糠町、ひいては世界で活躍するリーダーへと成長してくれることを心から願う。

今回の研修が成功裏に終わったのは、生徒たちの頑張りはもちろん、出発から帰国まで全行程に同行し、生活面から健康管理まで含め最もお世話になった日本旅行釧路支店の東原さん、全行程にわたり生徒たちに寄り添い、柔軟に対応して下さった現地ガイドの方、ゴミ山で衝撃的な現実を丁寧に解説して下さった日本旅行の岡部さん、そしてお忙しい中、要所で様子を見に駆けつけて下さった日本旅行インドネシア支社長の白井さんをはじめ、関係各位のたくさんの方々のサポートのおかげである。この場を借りて心から感謝申し上げる。

教育委員会として、この貴重な経験を消さないように、これからも全力でサポートと指導を続けていく所存である。